

『怯える者、囁く者』

アルベルバルの工房は半地下にある。寡黙で人嫌いに見なされているこのドワーフは他人に仕事の邪魔をされる事を何よりも嫌う。だから工房の入り口はそれと知られぬ目立たぬところにあるし、工房それ自体も外からでは解らないつくりになっている。

ただ、高位魔術師であり鍛冶の腕も確かな彼は知る人ぞ知る存在であり、大商業都市ケルマデイクの中の隠者を気取っていても、客に困るということとはなかった。

しかし人嫌いのアルベルバルは礼儀にもうるさい。礼儀知らずの高慢ちきな客など得意の魔法で脅かしてお帰り願うのが普通だ。そしてノックと同時に返事も待たずに扉を開けるせっかちな客も、だ。

「礼儀知らずは帰れ」

背後の扉で人の気配を感じたアルベルバルは振り返りもせずそう言い捨てた。だが言われた相手は彼の鞭のような一言にも怯まずに、玄関口にあるテーブルに何か重たいものを載せた。

「久し振り、アルベルバル」

うるさい礼儀知らずの相手をせねばならぬかと彼は老いた顔をしかめたが、相手の涼しげな、そして抑揚のない声を聞いて慌てて振り返った。

そこに立っていたのは光だった。アルベルバルは一瞬目を眩しげに細めた。光の正体は壁の上部にある窓から差し込んだ日光に反射した彼女の金髪だったが、

それでも一瞬アルベルバルには彼女自身の後光のように見えたものだ。

声の主は若い娘だった。いや、幼いと言い換えてもいいくらいだ。

アルベルバルにしてみてもここ三年ばかりの馴染み客だが、注文の難しさと金払いのよさは群を抜いていた。

彼女は重たげな蜂蜜色の三つ編みを背中に垂らしていた。

深い藍色に似た青い瞳はアルベルバルでも緊張し背筋を伸ばさなければならぬと思えるほど峻厳な光に満ちている。白い顔は動じる事なく、珊瑚色の唇に笑みが浮んだところなど、貴重な例外以外、彼はお目にかかった事がなかった。

手にした白銀の大剣を見れば十中八九誰もがその名を口にするはずだ。

「・・・久し振りだな、『城砦落し』」

彼女の名前、ポルメリア・ランキンを知らなくても二つ名である『城砦落し』は驚異と呆れ顔でもって噂される。人々を虐げる悪徳領主、己の魔法研究の為に非道な実験を繰り返す魔術師、邪神信仰の徒。

それらの輩をたった一人で根城ごと壊滅させて回っているのが目の前の、年端もいかない少女だった。

「礼儀知らずも相変わらずだが、仕事か？珍しく人とつるんで龍殺しに血道をあげていたらしいが・・・」

ポルメリアはアルベルバルの言葉に答えず、テーブルの上に置いた包みを広げた。

それは先日、彼がポルメリアに最後に会った際に渡した鎧一式だ。幾重にも鎧の板金を強化する魔法がかけられていた筈だ。その堅固な鎧が何かに噛み砕かれたように粉碎されていた。

アルベルバルが長い眉毛を持ち上げて文句を言う前にポルメリアが口を開いた。

「貴方の鎧をこんな風にしてしまって、悪かったと思っっている。早急に使えるようにして欲しい」

テーブルには大粒の宝石が数個載っている。アルベルバルはそれには目もくれずに不機嫌な調子で言った。

「竜を狩りたてていたらしいが、この鎧をこんな風にしまえるなんて、よほど大物らしいな。」

そういえば西の地で国を二つも三つも滅ぼして回っていた酔狂な赤い竜が殺されたそうだな。

竜の首を貴族の宮廷に持ち込んだのは、どうも目立たない、ぼつとしない男だったとか・・・」

彼の言葉にポルメリアは答えようとしなかった。興味がないと言った様子だ。だがアルベルバルには興味があった。

「ひよつとして、そいつを殺したのは、お前とその仲間なんじゃないのか？」

「彼も仲間だ」

ポルメリアは呟くように答えた。

「本当か？なら、なんで奴一人が半竜半悪魔のロスペロツソを倒した事になっているんだ？」

「・・・彼以外は皆死んでしまった。だからだろう」

「だがお前は生きていないじゃないか」

ここで初めてポルメリアは感情らしいものを浮かべた。それは自嘲気味の微笑みだった。

「今更私が『龍殺し』の称号を得たところで何にもならないだろう？」

確かにそれはそうかも知れない。彼女は北方の大国、ランキン侯爵の数多くいる子女の一人だ。

そしてたった一人で悪党を殺し続けるという奇特な騎士として名を馳せている。

それに関して随分と恨みや妬み、嫉み、そして感謝を捧げられてきた。

西方諸国を恐怖と混乱に陥れた悪竜を倒した事は、彼女にとっては数多い物語の一つに過ぎないのだろう。

「それに、私がロスペロツソに止めを刺した訳でもない。その鎧を見れば、貴方なら解るだろう？」

アルベルバルは彼女が持ち込んだ鎧を再び見た。完全にひしゃげてしまったそれは、もはや鎧としての形をなしていない。これではもう着用者は死んでいてもおかしくなかった。

彼は溜め息をついた。

「・・・よく生きていたもんだ」

「私も死を覚悟した。でも、次に目覚めた時には生きていたよ。」

そして首のないロスペロツソの死骸とともに仲間たちの死に姿も全て見た」

ポルメリアはやや目を伏せた。アルベルバルもなんと行って良いのか解らなかった。

「・・・良い仲間だったのか」

「私はいつも戦いの中で乾いた孤独感を抱えていた。」

剣を振るいながら、一人でないと思った事は初めてだった。だが皆死んでしまった」

「奴がいるだろう？」

「彼は安らかな生活を望んでいた。彼は『英雄』となった。

しばらくは望んだ生活を手に入れるだろう。もともと戦士ではなかったし、命を危険に晒す事も嫌がっていた。

願わくば、彼の望みがこの先ずっと叶え続けられる事を祈るばかりだ」

アルベルバルは呆れた顔で溜め息をついた。

「相変わらず『良くできた娘』だよ。お前は」

その言葉の意味が解らずポルメリアは首を傾げた。

「自分が娘と呼ばれる意味が解らないのだが……」

「……相変わらず朴念仁だな」

ますます意味が解らないとポルメリアは黙って困惑している。アルベルバルはそんな彼女を見て密かに笑った。

「まあ、また無事で戻ってきた祝儀だ。丹精込めて打ち直してやる。

しばらくは神殿の孤児院にいるのだろうか？ガキどもと飽きるまで戯れていればいい。予備の鎧も貸してやる」

「すまない。そして、ありがとう」

礼を言った後、少しばかりポルメリアは嬉しそうに微笑んだ。

それが本当に微かなものだったので、彼女の明るい声音を聞かなければアルベルバルにはそれと気付かなかったほどだ。

「帰る場所があるというのは、本当に嬉しいものだな、アルベルバル。私は今ほど、それを思わずにいられない。

貴方も変わらず生きていてくれて、ありがとう」

そう言つてポルメリアはアルベルバルの工房を出て行った。

「……あいつ、今笑っていたのか？」

不審そうに扉を見詰めるアルベルバルに、それを確かめる術はなかった。

クレドネエには『城砦落し』という少女がどういう人間であるのか解っている筈だった。全ての不正、『悪』を許さない。規定よりも多くの税を民衆から取り立てた徴税役人は、その上役の貴族ともども切り殺されたと言う。

クレドネエの価値観からすると、それは惨い話だった。その徴税役人は自分の取り分を規定よりも多目に懐に入れたに過ぎない。

税をかけられた民衆はたまったものではなかっただろうが、しかし上役の貴族や朋輩の騎士、

部下の兵士ともども全員が殺されるほどの罪ではなかったはずだ。

溜め込んだ財産を没収されて役目を取り上げられる。それぐらいの罰で済む罪ではないか。

実際に旅をともにした彼女はイリネアの影響もあつてか、それほどの無茶をしなかった。

だがクレドネエは自分がしでかした事を理解しているつもりだ。

仲間が全て死に絶えたと誤解した事とはいえ、実際に悪電ロスペロツソと一度も戦った事がない自分が、今『龍殺し』の英雄として祭り上げられているのだ。

折しも彼が得意絶頂のパレードの有様を彼女は見た。その青く清冽な瞳を彼は見てしまった。

彼女は何も言わずに立ち去っていった。しかし、それは彼女が納得した結果なのだろうか？彼にはそうは思えなかった。

あの時、洞穴には動くものは何一つ存在しなかった。はつきりとは見なかったが、ポルメリアとて遠目には死体のように見えたのだ。いくら強力な治癒能力を持つとはいえ、彼女も人間の筈である。疲れを癒さなければならぬだろう。

武器や防具も破損しているかも知れない。それを直すのに時間がかかるだろう。

ではそれらが全て回復したのなら？

疲れを癒し、武器と防具を調え次なる旅路につく時、ポルメリアは何を考えるだろうか？

死に絶えた仲間の名誉を奪い、富を独り占めにして、安穩と『龍殺し』の英雄に祭り上げられた自分、クレドネエの『不正』を正しに来るのではないか？

何せ彼女は『悪』を滅ぼす事を生き甲斐にしている奇妙な娘だ。すぐさま思いつく手近な『悪』を見逃す筈がない。

ポルメリアがこの宮殿に姿を現し、真相を暴露したならどうなるだろう？

公爵は自分を放逐するだろう。偽物の英雄として人々から石投げられ、ペテン師と罵られるだろう。

そして彼女の『善』なる刃が自分に向けられるのだ。

クレドネエはぞっとした。

トゥルスとポルメリアの刃は竜の鱗さえ砕く破壊力を持っていた。

そんな剣をまともに受ければ、ごく普通の人間であるクレドネエの体など一撃でひしゃげてしまうに決まっている。

理性は言った。彼女が来る前に逃げるべきだと。身に過ぎた待遇を存分に受けた。もう潮時だ。ここで放浪の身に戻るべきだ。

人込みに紛れてしまえば彼女は自分を見つける事はできないだろう。クレドネエの特技は隠れること、紛れ込むことなのだ。

しかし一方で欲望がささやいた。本当にそれで良いのかと。放浪生活に戻るといふ事は、食うか食えぬかの生活に戻るといふことだ。イリネアたちと旅をしていた時は良かった。

彼らは全て凄腕の冒険者で、最後の敵以外、どんな竜にも引けを取らずに戦い、その財宝を我が物にする事ができた。

だが彼らはもう誰もいない。皆ロスペロツソと相討ちしたように死に絶えた。

たった一人でイリネアたちと旅した時と同じような安楽を求める事はできない。

彼の特技は隠れる以外は噂話を聞き出したり調べたりする事ぐらいだ。宝を抱え込んだ竜など滅ぼす事はできない。

せいぜいが日雇いで商人に仕えるのが関の山だ。それとて子飼いではないから端の仕事しか回ってこないだろう。

情報収集は重要な機密でもある。部外者をそうそう信用して任せる事はない。使い走りのような仕事では稼ぎなど高が知れている。

このまま宮殿に留まれば食うには困らない。だがいつかは不正を許さぬポルメリアの刃が襲い掛かってくるだろう。

出奔して隠ればポルメリアに見つかる事はあるまい。だがその日暮らしの貧しさに陥る可能性がある。

クレドネエにはどうしようもなかった。どうにも決められなかった。ただ部屋に引きこもり苦悶する日々が続いた。

「何を悩んでいるのですかねえ『龍殺し』？」

彼の部屋には誰も入れない筈だった。食事を運ぶ使用人すら中に入れない。用向きがあれば全て扉のところで済ませた。

用心深いクレドネエは部屋の中に誰かが入ってくればすぐ自分に解る雷鳴石の警報を設置していた。声の主はその警報に引つかからずに入ってきたというのだろうか？

「誰だ、お前」

振り返ったクレドネエの目に飛び込んできたのは赤毛の、年端もいかない少年だった。

一瞬公爵の息子なのかと思ったが、十歳前後の少年は公爵の息子にはいない筈だ。彼の疑惑の瞳に、赤毛の少年は恭しく礼をして答えた。

「この宮廷でお世話になっております『ワーム』と申します旅芸人・・・詩人？道化？・・・まあ、そんなような者です。『龍殺し』の英雄様から、直にその時のお話など伺いたくお邪魔いたしました次第」

そういえば公爵の側近くに赤毛の少年がいたな、とぼんやりと思い出す。

公爵の寵児なのだろうか。顔立ちは旅芸人にしては品がある。

上機嫌でにこやかで、ワーム・・・虫などという名前が似合わない陽気な少年だ。

人の心を和ませるだろう少年の仕草。だがそれが却ってクレドネエには気に入らなかった。

「道化を呼んだ覚えはない。話す事なんか何も無い。とっとと出て行ってくれ」

しかし『ワーム』は畏れ入った様子もなく無邪気に首をひねるばかりだ。

「お話いただける事がない？」

「そうだ」

「本当ですか？」

「お前なんか話す事はない」

「おやおや、その胸のうちには納まり切れない不安がはちきれんばかりになっているとお見受けいたしますよ。

例えば、貴方の過去について融通の利かないかつてのお仲間がいちゃもんをつけてくるとか、

そんなような類の話ではありませんか？」

凶星を刺されてクレドネエは青くなり『ワーム』を改めて見た。

赤毛の少年は無邪気な顔で得意げに思った事を口にしただけで悪意も底意もないように見える。

だがその言葉は余りにもクレドネエの胸のうちを見透かしていて気持ち悪くなる。

「うるさいな。どっかへ行っちまえよー！」

「お呼びではないとは残念至極。しかし一つだけ忠告させていただいて、よろしいですか？」

過去はそれを知る者がいるからこそ、存在するのです。誰一人知らなければ、そんな事実はなかった事になる。誰も知らなければどんな善行も悪行も存在しない事になるのですよ。

いや、出すぎた真似をいたしました。お許しただければ幸いです。

わたくしめは道化のようなもの。気散じに『英雄』にお呼ばれただければ大した名譽。気鬱の時などどうぞお声をかけて下さいまし。楽しい時間をお約束します。では、また」

『ワーム』はやってきた時と同じように音もなく去っていった。

だがクレドネエは少年に言われた事に気を取られて、その事に気付かない。

誰も知らなければ、過去はなかった事になる。

ロスペロツソを倒したのが実は彼ではなく、『城砦落し』や死んだ『龍殺し』たちである事を知るのは、クレドネエを除けば『城砦落し』ポルメリア・ランキン以外には存在しない。

もし彼女が死ねば、クレドネエが『龍殺し』を名乗ろうと咎める者は誰一人いなくなるという事だ。

死ぬ？『城砦落し』が？

ありえる事とは思えなかった。彼女は天使の眷属。その戦闘力、その防御力、どれも並大抵の人間では倒せない力を持っている。現に死の淵からも蘇ってきたではないか。

だが彼女さえ死ねば真実を知る者は誰一人いなくなり、彼は安穩とこの都で生きていけるのだ。

彼女さえいなくなれば……。

クレドネエは自分の心が闇に染まっていく事に気がつかなかった。

話は少し遡る。

『ワーム』は闇に閉ざされた部屋の中で水晶球に向かっていた。場所は宮殿の基部とも言える地下室。

彼は魔法陣の中心で静かに呪文を唱えた。魔法陣は光らない。しかし水晶球の中にはある人影が現れた。

いや、人と言っているのだろうか？それは高貴な異形とでも言うべき存在で、

何よりもまず人間が目にはれば畏怖だけを感じる神のようなものだった。

是非にと同席した召喚術師は『ワーム』が魔法的力を平面的に遮断する魔法陣の中で交信してくれた事を感謝した。

その姿を見るだけで戦慄が止まらない。もしもその魔法的力に晒されたら、自分は正気を保てるかどうか自信がない。

「お呼びだそうですね、閣下」

相変わらず『ワーム』は明るく上機嫌で無邪気なままだ。水晶球の中の恐怖などまったく意に介していないようだ。

「遅いぞ。貴様は時々我が配下である事を忘れているのではあるまいな？」

水晶球の中の者は怒気を含んだ言葉で詰問する。その声を聞いただけで召喚術師は縮み上がってしまいそうになる。これが地獄の支配者の声なのだ。地獄の先触れである『ワーム』に命じる事ができる只一人の存在。

だが『ワーム』は一向に畏れ入る様子がなかった。

「とんでもございませんよ、閣下。閣下の喜びこそ我が喜びと常々思っておりますとも」

「では何故計画を遅らせておる！」

その罵声で魔法陣がやや光を放った。遠い下方次元から念を飛ばしているというのに、その声で魔法陣が揺らいだのだ。

「それは再三ご報告しておりますように、次元の穴をより大きく、より安定化させる為に、より多くの魂を集めなければならず、その為の時間がですね・・・」

「言い訳はいくら！」

話の腰を折られて流石の『ワーム』もやや不機嫌になったようだ。

しかしそれは一瞬の事だ。言い訳を言う必要がないと言われたのだから黙ればいいのだと解釈して、大人しく口を閉ざした。

水晶球は尚も詰問を続ける。

「貴様は魂を集めると称して人間どもに、事もあろうに『善政』を施しているそうだな？」

「効率良く魂を集める為です。」

こちらが力づくで集めるよりも自分の足でやってきてくれた方が手間も時間も省けるじゃないですか。おかげで予定の二倍の魂が確保できそうですよ」

「いいか。我が使う魂は幸福に塗れてはいかんのだぞ」

「重々承知していますって。苦痛や苦惱、絶望がより深ければ深いほど使いやすい魂になります」

「解っているならば・・・」

「一旦幸福を味わった人間が絶望に突き落とされる方が、より深い苦悩を覚えるというものですよ、閣下。とにかく全ては順調です。時間さえあればこの次元に大量の軍団を投入できる穴が開きますよ」

「その時間が怪しい」

「は？」

「天使どもの軍団が攻勢を仕掛けてくる気配がある」

「え？何処ですか？」

「それは解らん。もっか調査中だ」

『ワーム』はこけそうになったが、しかしいつもの事だと踏み止まった。悪魔の世界に信頼や信用は存在しないと聞いていい。全て自分が調べて裏づけをとらなければ相手の話を信じる事はできない。

地獄の諸君主はしばしば虚言を弄して部下を怯えさせたり励ましたり、希望を与えたり絶望を与えたりする。そうする事が部下の悪魔たちを働かせるのに不可欠な手段だと思っっているのだ。

閣下の言葉もその一つだろうと『ワーム』は理解した。だが自分の上司がいやに焦っている事も感じ取っていた。もともと、それも欺きの手立ての一つかも知れないが。

「とにかく戦況は膠着状態にある。天使どもが何かを仕掛けてくる前に、こちらから攻撃し主導権を握らなければならぬ。早急に次元の穴を開ける。鳥肌が立つような『善政』などとつとと切り上げて、人間どもの魂を我らに捧げよ。」

「さすれば貴様の勲功は第一級だ。諸君主の一人に取り立てる事も考慮するぞ。とにかく、さっさと仕事をする事だ。期待しているぞ」通信は強引に途切れた。閣下の元に何か別の知らせでも届いたのかも知れない。

召喚術師は水晶球を通してでも感じる威圧感に冷や汗をかいていた。それが突然消え失せたので安堵の溜め息を漏らす。だが『ワーム』は違った。大胆にも水晶球に向かって舌を出している。

彼の言い分を聞かず、自分の言いたいことだけをまくしたてて消えた上司に腹を立てているようだ。

「まったく、お気楽な事ばかり言ってくれるよ。」

二十万という魂を一網打尽にするのに、どれだけ手間隙かけなければならぬのか、まったく理解していない。それでなくても他の列強の目がうるさくなってきたというのに・・・」

「何か不都合な事でも？」

都市一つをまるごと網羅する魔法陣構築に全力を注いでいる召喚術師には他の情報がなかなか入ってこない。地獄の諸君主たちの督促の他にも問題が発生したのかと怯えてしまう。

「うーん。余りにも多数の難民がこのメルクス目指してなだれ込んでいるだろう？」

中にはロスペロツソに焼き払われた国や都市だけでなく、

他の国々で食い詰めた連中までこの町を目指して移動しているらしいんだ。

ほら、城壁に囲まれ、上水道を完備し、下水まで建築中で、建設工事が多いから仕事に困らない、そんな素敵な都市だろう、ここは『ワーム』はようやく無邪気な表情を取り戻して笑う。確かに、彼の発想は大当たりだった。難民や食うに困った貧民たちは皆この都市を目指す。自分たちの魂を地獄に捧げる為の仕掛けとも知らずに、職を求め、食を求めて後から後から人々がやってくる。

「それがどうも列強の警戒心を呼んでいるらしいんだよねえ。」

今朝方も公爵の下にフォリヴァス、ハガート、シヴァーズ、アカパイン、イルーク、ヤニース、キスリングの諸侯が連名で抗議文を送ってきた。

ロスペロツソ討伐の英雄を祭り上げて勝手にお祭り騒ぎをした事まで文句を言っていたが、何、本音は自分たちの領民がメルクス目指してなだれ込んでいる事を恐れているのさ」

『ワーム』は簡単に言ったが召喚術師は抗議を送りつけてきた諸侯の名前を聞いただけで震え上がった。全て中原の、しかも複数の領国を支配する大諸侯ではないか。たった一人でも数万の軍勢を起せる実力者ばかり。しかもフォリヴァス家は『天使王国』宰相家であり、天使たちがこの世界より消え失せてしまった現在、事実上の『天使王国』主権者といつてよかった。

「・・・大丈夫なのでしょうか？」

「時間稼ぎの手を打つさ。それはいいとして、問題は君の方の作業状態なんだけど、どうよ？」

「現在の二十万人で手を打たれるのでしたら、半月後にはおおよその目途がつかます」

「それは半月後には、開けちゃって大丈夫ということ？」

「は？」

「ふーむ。そうか。ではそれだけの時間、なんとかつくってみましょう。幸い使えそうな手駒が一つ迷い込んできたし」

「は？」

『龍殺し』の英雄殿だよ。何か知らないけどパレードの時から怯えまくっている。それをつつつけば面白い様に動いてくれそうだよ。目端が利いて用心深い男のようだから、使いでがあるだろう。人間だからロスペロツソの時みたいに大騒ぎにもならないだろうし」

それで『ワーム』はクレドネエにちよっかいをかけてみた訳だが、直接彼と会ってみて面白い事が解ったようだった。いや、『ワーム』からすると余り面白くない事実かも知れない。

「しづといなあ。『城砦落し』生きているらしいよ」

「なんですと？」

「パレードの時に見つけちゃったらしいよ。あつちはとっと立ち去ったみたいだけど、それ以来、我らの『英雄』は心穏やかでないらしい。表層的な心を読み取っただけなんだけど、どうもそういうことらしいね。しかしロスペロツソも役に立たなかったもんだ。肝心かなめの相手を殺し損ねるなんてね。

それはそうとして、どうするか・・・」

しばし沈黙した『ワーム』だったが、次の瞬間にはもうシリアスな表情は消えていた。

「まっ、我らの『英雄』に獅子奮迅の働きをしてみよう手筈を整えよう。

あまり地獄からあからさまな援軍を呼び込むというのも派手だし、

列強がこの都市に注目するということは、宗教関係の大物達も無関心ではいられないだろう。不審を覚えられて邪魔されるのも面倒だ。

とりあえず列強間のトラブルを調べてネタを仕込む事にしよう」

『城砦落し』の件はどうするのです？」

「それに連動して、こちらには注意が向かないようにするとしよう。君は一刻も早く魔法陣を完成させる事を考えたまえ。

さーてきて、なかなか楽をさせてはくれないねえ」

そう言いながら『ワーム』は楽しみに笑っていた。その可愛い顔の下で一体どんな悪辣な事を考えているのか。召喚術師は強いて知りたいとは思わなかった。

鎧の修繕が終わり、ケルマディクの孤児院での楽しくも安らかな日々が終わりを迎える頃、

ポルメリアが子供たちと名残を惜しんで遊んでいる時だった。孤児院の世話役をしている婦人が彼女に来客があると告げた。

「本神殿の客間でお待ちだそうです」

来客は孤児院まで訪ねてこなかったということだ。彼女が寝泊りしている孤児院はケルマディクの万神殿の一角にある。

この『天使王国』で崇拜されている善き神々のほぼ全てを祀っている万神殿で待つという事は、初対面だという事なのだろうか？

ポルメリアの事は『城砦落し』の二つ名とともに流布されている。悪人を好んで殺す奇特な騎士。

だから時々、自分達を苦しめる悪徳領主や竜、魔法使いを倒してくれと依頼に来る人々がいる。

もちろん彼女はほとんど旅の空で戦っている訳だから、そういう依頼人が運良く彼女と巡り会える機会はほとんどない。だがまったくくない訳ではなかった。

今回のボルメリアは子供たちと遊ぶ事ばかりに時間を費やしてしまい、世間の情報を仕入れる事をしていなかった。

初めて仲間と呼べる者たちと旅をし、そしてその仲間をほとんど死なせて帰ってきた。だから自分が見知っている人々との触れ合いが何事にも変え難いような気がして、ついつい孤児院で過ごす時間が長くなってしまっていたのだ。

もしも来客が依頼を望む人たちなら、話によってはそれを受けようと考えた。そろそろ動かなければならない。

あまり長居をして彼女を恨む者たちがやってくれば、万神殿、そして孤児院の子供たちを危険にさらす事になるのだ。

そうだ。ここでの生活は、いくら自分が望もうとも夢幻のようなものなのだ。

戦いこそが、我が宿命なのだから。

豊饒の女神に仕える神官に案内されて万神殿の客間にやってきた頃には、もう子供たちのポリーは消え失せていた。そこにいるのは、たった一人で城砦を落とす、冴えた光を思わせる騎士、

『城砦落し』ボルメリア・ランキンその人以外にありえなかった。

客間に入ってボルメリアは違和感を覚えた。確かに入り口に背を向けて誰かが座っている。

黒髪が豊かに蓄えられていて、その美しさを見れば客人が高貴な身分か、あるいは豊かな財産家のように思えた。長い髪を豊かに美しく保つという事は、苦勞をせずに済む人々の特権に近いのだ。

ところが確かに人が座っているのが目に飛び込んできているというのに、その人にはまるで気配というものが感じられないのだ。

神殿内という事で油断してしまった。手元には武器らしいものがない。咄嗟に部屋の中の調度品を見渡す。さすがに武器になりそうなものは置いていない。いざとなったら燭台を手に戦うしかなさそうだ。

豊かな黒髪の客人は、ボルメリアが部屋に足を踏み入れると同時に立ち上がった。

そして音もなく静かに振り返り、そして優雅に一礼をした。それは久しく忘れていた宮廷儀礼だった。

「ランキン侯爵令嬢、ボルメリア・ランキンさまでございますね」

声は若い女性のものだ。その落ち着いた殷懃な声は宮廷人のものに違いないが、しかしボルメリアが知っている宮廷人たちとは違うようだ。何か空気が違う。

「貴女は？」

客人は心持ち頭を上げて顔を見せた。ボルメリアよりも僅かに年上だろうか？柔らかな物言いに相応しく、柔らかな笑みを浮かべている。だがボルメリアの青い瞳は誤魔化されなかった。

彼女は柔らかな外見の中に、硬く強固なものを持っている。

「フォリヴァス宰相家に仕えますリユイーズ・ポントワと申します。お見知りおき下さい、ご令嬢」

相手は貴族社会におけるの礼儀にのっとって喋っているに過ぎない。

だがそんなものとは縁遠い世界にいるボルメリアにとっては、ただ煩わしいだけに過ぎなかった。

「あらかじめ申し上げておきますが、私はランキンを名乗る事が許されておりますが、侯爵家とは無関係の存在です。私は生れ落ちたその日より善なる軍神に捧げられた者。ランキン侯爵家にお話があるでしたら、見当違いです。それに私は領地を持たずとも騎士です。令嬢はやめていただきたい」

ポルメリアの硬い不快感にリュイーズと名乗った娘は改めて頭を下げた。

「ご不快になられた点はお許しください、ポルメリア卿。ランキン家は特殊なお家柄。無知がしかした無礼とお流しくださいませ。それに、ランキン侯爵家ではなく、ポルメリア卿、貴女ご自身にお話があり参りました次第」

「私に？」

リュイーズの言葉に興味を覚えたポルメリアは客間の椅子に向かう事にした。

ポルメリアは基本的に流浪の騎士だ。ランキン侯爵家の血に繋がる貴族として記録には載っているし、情報通にも知られているが、領地も部下も持たない。政治的な価値などあまりない存在に何故『天使王国』宰相家から使者などくるのだろうか？

もともと、宮廷儀礼を身につけているとはいえ、リュイーズの服装は爵位持ちとは思えなかった。

まるでどこかの武闘修道僧のように質素な身なりだ。供も見えない。という事は政治向きの話ではないのだろう。

実質的に『天使王国』最高権力者が極秘でしかも下っ端とはいえ使者を、貴族出とはいえ流浪の騎士に派遣するなんて一体何事なのか？

ポルメリアはリュイーズに着席を促す。しかしリュイーズはすぐに席にはつかなかった。

「失礼ですが、お人払いを」

人払いも何もその場には彼女たち以外にはポルメリアを案内してきた豊饒の女神の神官しかいない。ポルメリアは神官に目礼し、神官は少しおどけて肩をすくめ苦笑いして扉を閉めた。

「ありがとうございます、卿」

「一介の流浪の騎士へ話すというのに、勿体つけているとは思われませんか、リュイーズ卿？」

言われ慣れていない言葉が勘に触る。ポルメリアは席につきながら少しばかり嫌味を言った。だがリュイーズは眉一つ動かさない。

「国家の大事でございますから。それに私は騎士ではありません。どうぞ名前のみでお呼び下さい」

席についたリュイーズがまっすぐにポルメリアの青い瞳を見る。

柔らかい物腰の中に感じ取れる強固ななにか同様、彼女の瞳は黒曜石のようにきらめき、そして硬い。

「それでは、一介の騎士にどんな国家の大事を打ち明けられるというのです？」

リュイーズがふと探るように目を細めた。

「ポルメリア卿は、中原の情勢についてどの程度ご存知です？」

「市井の者たち程度には」

「では一からご説明申し上げます。『天使王国』の中原に七つの大領主が覇を競い合っているのは、ご存知ですね？大まかに言えば宰相家のフォリヴァス、アカバイン、イルーク、キスリングが主流派、シヴァーズ、ハガート、ヤニースが反主流派で、彼らは中原の争いに南方諸侯の雄オウルバインを引き込みようとしています」

リュイーズが名前を上げたのは、かつて天使たちから王国の支配を委任された七大公の末裔たちだった。協力して王国の騒乱を収めるべき七大公が二派に分かれて主導権争いをしているのだ。ポルメリアの金色の盾がひそめられた。だがリュイーズはそんなポルメリアの表情の変化に気づかないふりをして話を進めた。

「しかし先頃、七つの列強諸家は連名でメルクス公爵に申し入れをいたしました。曰く、公爵家は諸国の流民を集めすぎている、と」

ポルメリアもメルクスの話は知っている。ロスペロツソに襲われ、着の身着のまま逃げ惑った人々が辿り着いたのがメルクスの都だ。例のパレードも知っている。

難民達は惨めな暮らしではなく、働いて日々の糧を得、充実した誇りを持った暮らしをしているようで安心したものだった。

難民を受け入れる事が列強にとって不都合であるかと？」

訳が解らない話だ。この世界には余裕などない。どの土地も地方も、自分たちが生きていくだけで手一杯。災難にあった人々に同情はしても、助けるなど思いもよらない。食べられなくなった難民が盗賊や強盗に変わるのは自明の理だ。生きていく為には食わねばならない。食べるものがなければ奪うしかない。

難民が治安を乱す原因にもなるのだ。

それをメルクスが平和裏に受け入れ生きる糧を与えているならば、喜ばしい事ではあっても非難すべき事ではない。しかし、そう思うポルメリアは政治の事を知らなすぎた。

「メルクスが集めた人の数。一体何人だと思いです？」

「さあ・・・」

「十万を越えています。しかも流れ込むのは難民だけではない。

天災や疫病で日々の暮らしの糧を失った列強の領民たちも含まれています。それが何を意味するのか。お解りになりませんか？」

「良い事ではありませんか？少なくともメルクス公爵は良い事はなさっている」

リュイーズは初めて表情らしいものを浮かべた。それは落胆といった。

「貴女は支配者であった事がないから、そう言えるのです。

自分の領国の民が他国へ移ってしまったらどうなりますか？領主は、領民が支払う租税で生活しているのですよ。自分の財産を他人に取られているという事なのですよ、これは」

「では、列強の領主方は財産管理に失敗しているという事ですね。善き支配を行えば人はその土地から離れない。生まれ育った土地から出て行くなんて、よっぽどの事です。民は生まれ育った土地こそ全てですから」

人を財産扱いする考え方が好きになれないポルメリアはリュイーズの言葉にも冷たく返した。

しかしリュイーズとてそれを素直に受け取りはしなかった。

「そうおっしゃられれば返す言葉がないが、しかし自分の都城に逃れてきた民を何も言わずに受け入れ、

他の領主には何の了解も得ないというのは、作法に反する。すくなくとも他の領主は疑念を覚えます。メルクス公爵は自分たちの民を奪い、領土をもぬけの殻にしてしまおうとしている、と」

ポルメリアは心の中で舌打ちをした。危機認識がずれているのだ。彼女は領民の目線で物を考えている。だがリュイズのそれはあくまでも領主の考えなのだ。いつまで話しても議論は平行線を辿るだろう。こんな事で時間を潰すつもりは二人にはなかった。

「それだ？」

「七列強が歩調を合わせた事は近年にない事です。これを機に我が君は七列強主導による『天使王国』統治を考えておられる。そうすれば戦乱も減り、民の災いも減るといふもの。必要ならばオウルバインも入れれば、より強固なものになるでしょう。

しかし、それを良く思わない者がいるようです。先日、ハガートの当主が暗殺されました。フォリヴァスの殿と共同歩調を取られ、反主流派の意見を融和に導いた方です。

その結果、ハガートで後継者争いの混乱が起きています。続いてヤニースの世継ぎが暗殺されました。彼は反主流派の中でも強硬派です。

もともと七列強による政界主導に懐疑的であったヤニースは完全にフォリヴァスを疑っています。メルクス公爵追及で歩調を合わせた列強が、再び抗争を開始しようとしているのです」

そうなれば大きな戦争になる事は間違いない。双方ともに複数の領国を持つ大領主だ。

他の領主たちもどちらかに旗幟を明らかにしなくてはならなくなる。そうなれば中原は真っ二つに割れる。いや、反主流派と言われる貴族たちは南方のオウルバインと結んでいるから、南方諸侯まで巻き込んで全面戦争になるだろう。

無辜の民が、また苦しめられるのだ。

ポルメリアは苦々しく奥歯を噛み締めた。

「それで、私に一体どうしろと？」

「私と一緒に事の真相を解明していただきたい。フォリヴァスは今、大規模な戦争を行うつもりはありません。そんな事しても何も得られない。しかしフォリヴァス主導で暗殺者をつきとめても、他の者はでっちあげと考えるだけでしょ。主流派の中でもアカパインやキスリングはヤニースと領国紛争を抱えています。

反主流派と手を結んで奪われた領地を取り戻せなくなる事を恐れている」

「彼らではないのですか犯人は。それに、私は何かを調べるとか聞き出すとか、そういう事は不得手です。剣をとって戦えというならまだしも・・・」

「調査は私どもが行います。貴女はその見届け人になって欲しいのです」

「何故私なのです？私は一介の流浪者ですよ」

それが最大の疑問だった。列強諸侯にしてみれば、彼女は北の辺境の大国ランキン家出身とはいえ、現在はそれとは何の関係もない流浪の騎士。しかも年端もいかない少女だった。

そんな得体の知れない存在が見届け人になって、何の意味があるのだろう。

しかしリュイズは言葉が続けた。

「貴女が悪辣な領主、代官を滅ぼしている事は知れ渡っています。それこそ主流派、反主流派関係なしに。自分たちの子飼いの部下を殺されたと考えている諸侯は大勢いますよ。

ただしあまりにも悪辣すぎて処分しなければと考えていた輩ばかりだったので、表立って貴女を批難する事はありませんが、列強は全て貴女によって痛い目を見ています。我がフォリヴァスも同様です。

だからこそ、信頼できるではありませんか。貴女は私利私欲で動かない。貴女はどんな貴族にも組みささない。貴女はいつも、公正だ」

そう見られているのだろうか？ポルメリアの心が微かに痛んだ。公正であろうとはしている。だが本当に公正であった事などあるのだろうか？彼女は自分が助けられなかった人々の顔を思い出した。そして、目の前のリュイーズに確信を持って言われて苦笑した。

生きている人間で、本当の意味で公正であったものなど存在しないだろうに、と。

「・・・フォリヴァス家の調査では信用できない。しかし私が関われば信じざるをえない。そう列強の方がおっしゃっているのですか？」

「少なくとも我が殿はそうお考えです。今回の暗殺を企んだ者は明らかに七列強が同盟を結ぶ事を恐れています。オウルバインか、あるいは東方のウォレンサー、もしくはメルクス公爵。

お力添えいただければ、無用な戦いを起さずに済み、無辜の民が不幸になる事もないでしょう。

お願いできないでしょうか？」

ポルメリアはやや目を伏せて考えた。これは悪との戦いなのだろうか？彼女の行動原理はそれに尽きた。実家であるランキン侯爵家の利害さえも考えていない。

もちろんランキンは北方の辺境に位置し、中原の勢力争いには直接関係のない存在だ。

だが、もしランキン家が人々を苦しめる元凶になっているならば、彼女は躊躇わず剣を振うだろう。

もしリュイーズの依頼を受ければ、それはフォリヴァス家に利する行為だ。彼らが悪でないという保証はない。だが逆に、もし彼らが悪であるならば、その目で見極めて叩く事ができる。

中原に騒乱を起そうとしているものは、もちろん悪だろう。

それを倒して戦争を未然に止める事ができたなら、それはそれで善なる軍神の御心にかなう戦いであるはずだ。真相がフォリヴァスの策謀であつてもかまわないという事だ。

ポルメリアは目をあげた。

「解りました。お手伝いいたします。しかし私は本当に戦う事しか能のない女です。それだけをご承知下さい」

「ありがとうございます、卿」

リュイーズは再び柔らかい笑顔を見せた。だがポルメリアの青い瞳は騙されなかった。リュイーズの瞳は一度も笑っていない。彼女を信用する理由は、まだなかった。